

報告・資料

学生が抱く保育者像について

－保育所実習事後指導の取り組みの中で－

An image of early childhood educator held by college students :
wrestle with guidance after the teaching practice in a day nursery.

居原田 洋子

1. はじめに

実習について、保育や子どもについての不安な気持ちと共に、意欲や希望が交錯して複雑な気持ちになることは当然のことである。そのための手立てとして事前指導が極めて重要なことは今改めて論ずるまでもない。本学では実習にスムーズに入れるように配慮しているにもかかわらず、未知への挑戦に胸をふくらませ実習に入った学生の中には実習後に得る保育者への自信が薄れてくる場合がある。また、実践の場面に即した指導を受けてきた学生が実習経験により、「大学で習った理論と現場の保育はずいぶん違う。」と感じる者がいるのも事実である。これは、理論と実践の関係の問題であるが、「理論から実践へ」「実践から理論へ」どう結びつけていくかを追求することが課題となる。宮里¹⁾は、実践と理論をつなぐ有力な手だてとして実践経験を記録することに意味があると述べている。これは、第一に、記録をとることつまり「書く」ことによって、自分の働きかけの問題点がはっきりし、保育が意識化されること。第二に、他ならぬ「自分自身」実習経験に学ぶことで、保育を主体的に考えることになること。第三に、具体的な事実に基づいてその意味を考えることで「実践を理論化」するきっかけになる。総じて実践的に捉える力がつくと言うことである。また、戸田²⁾は記録の媒介性について「記録は事実を反映すると同時に、その事実を記録する人の事実の捉え方、すなわち認識の枠組みをも反映している」とし、記録をすることが保育の実践的手応えを内側から検討

可能なものとする上で必要不可欠であると考えている。そして、石川³⁾らは保育における指導の本質を追求するにあたって学生がもっている理想の保育者像、理想とする保育を具体的に個人の中で描いていくことが重要であり、個々の学生の保育者としての成長過程に応じた援助が必要であると指摘している。そこで保育実習事後指導の中で、実習中困ったこと・悩んだことや実習園では質問できなかった内容や残った疑問を発表・記録・考察し、学生と共に考えながらアドバイスしていくことにより、子ども像・保育観がより明確になるのではないかと考えた。また、実習体験により喪失された保育者志向を喚起できるきっかけになり、その結果、学生ひとりひとりの特性に応じた保育者像をつかむことができるのではないかと考えた。本報告では、演習という形態も活かしそこで得られた知見と実践記録の意味、取り組みの内容も併せて実体験から得た保育者像について考察する。

2. 研究方法

1) 方法

保育実習事後指導の授業時間6回を使い実施した。内容は発表・レポート・調査・講義をもとに行った。

2) 対象

本学幼児教育学科2年生86名である。

3) 時期

保育実習事後指導の授業日は平成6年11月29日、12月6日、12月13日、平成7年1月17日、1月

24日、1月31日である。

4) 実習担当対象児

0歳児担当クラスが17.4%、1歳児担当クラス20.9%、2歳児担当クラス19.8%、3歳児担当クラス18.6%、4歳児担当クラス7.0%、5歳児担当クラス0%、3歳未満混合クラス8.1%、1～3歳児混合クラス4.7%、0～5歳児混合クラス3.5%であった。

3. 研究内容及び考察

1) 学生一人ずつ前に出て予め出された課題（これは実習事前指導の時間に原稿用紙400字程度にまとめるように指導した）を発表する。その内容は実習の目的に対しての反省・自己評価だけではなく、困ったこと、悩んだこと、残った疑問、実習園では質問できなかった内容、実習日誌に書けなかった悲しい経験も報告するように伝えた。他の学生には「共感できたこと」「疑問に思ったこと」「それについての考察」という項目をもうけB5サイズ（以下に示す）用紙を配り学生一人ひとりの発表に対してレポートさせ、毎回提出するように指導した。これは「実践への照り返し⁴⁾」という点と野田⁵⁾が指摘しているように事後学習として実習で得た経験を客観的に分析、整理して自分の課題場面に気づき対応方法をその場限りのものとして終わらすことのないように、次の実習や学習につなげる為である。

*レポートの形式

氏名 組 番号

共感できたこと

疑問に思ったこと

それについての考察

*学生のレポート例

共感できたこと

- ・発達段階に合った遊びをすることは難しかったこと。
- ・安全面や環境面の留意が必要なこと。
- ・何でもしてあげるのではなくて自分でやろうという気持ちをもてるように園の先生が指導されたこと。

疑問に思ったこと

- ・子どもの昼寝の時間、先生が子どもを早く寝かせているので早く寝かせようとあせったという意見。
- ・部屋の中にコーナーをつくっておけば子どもが走らなくてもよいという意見。

それについての考察

- ・子どもがしんどい時はなかなか眠ることができなかつたり、家でよく眠ってきた子どもは昼寝の時間に眠たくないと思うので、眠れない子どもは保育者のそばで遊ばせたり、しんどそうな子どもはゆったりとした気持ちで寄り添ってあげたらよいのではないかと思います。初め私もなかなか眠れない子どもに接しましたが、知らない人にトントンされて平気で眠れる子どもの方が不思議だと思います
- ・環境作りは素晴らしいと思いましたが、子どもたちが走らなくてすむように環境作りをしているのだとしたら、もう少し子どもたちが走らないように他のことで知らせていく必要があるのではないかと思います。

一人の学生が実習での経験を発表すると他の85名の学生が上記のようなレポートをまとめていく。この内容は実習する中で学生たちが学んだ点であるとも考えられる。これを1回から3回目の保育実習事後指導の授業時間に繰り返し行った。

全員が一人ずつ発表することによってより広い視野での実習報告ができ、それについての考察をすることによって経験から得た事柄を再認識でき、保母として要求される事柄が明確になったように思う。また、指

導を受けたことに対して自己嫌悪や自信喪失に陥った学生が他の学生のレポートに接することで共感したり、また自分のレポートが他の学生に共感されたりすることで自分自身をよりよい方向に変革していく方策を考える機会ができたように思う。

2) レポートを整理すると次の16項目に分類できた。

- ①発達段階について
- ②かみつきやたく子どもの指導について
- ③漢字の指導について
- ④おもむつをはかせずパンツをはかせる乳児の指導について
- ⑤昼寝の指導について（無理やり寝かすこと、パジャマの着替えをさせること）
- ⑥部屋に多くのコーナーをつくることについて
- ⑦半袖・半ズボン・裸足の保育について
- ⑧しっかり叱るということについて
- ⑨けんかの仲裁について
- ⑩ありがとう・どういたしまして等の挨拶について
- ⑪指導案を書かなくてもよいと言われたことについて
- ⑫食事の指導について（嫌いな食べ物の食べさせ方）
- ⑬教師間・保護者への対応のあり方について
- ⑭子どもの前で叱られたことについて
- ⑮指導してもらえなかったことについて
- ⑯学んだ点

各項目ごとに内容を整理し、「指導者側の理由」と「学生の意見」（⑯を除く）に分けてまとめた。ここでは、比較的説明しやすい3つの事例を取り上げてみた。最初にことわっておかなければならないことは、以下に取り挙げた、実習日記に書けなかった事柄、悲しい経験などの内容が実習園や指導をして下さった先生方を非難しているものではないということである。このことは、ほとんどの学生が、レポートの最後に実習先への感謝の言葉を述べていることから明らかにされている。

*各項目ごとにまとめられた代表的な例

- ②「かみつきや叩く」といった行為について
（教師側の理由）
 - ・そのような子どもは悪い子である。
 （学生の意見）
 - ・悪い子どもではないと思う。私はそんな子どもに出会ったら十分甘えさせて受け入れてやりたいと思う。
 - ・友達にかみついたり、叩いたりして寂しい思いを言葉で表せない分、行動にでる子どもがいた。
 - ・その子ども全てを受け入れてあげることができたら、どんなに素敵だろうと思う。
- ⑥部屋に多くのコーナーをつくることについて
（教師側の理由）
 - ・子どもたちが走らなくてもいいから良い。
 （学生の意見）
 - ・自分たちでつくれる場所（コーナー）がある方が、自分たちで考えて遊ぶことができると思う。与えられたコーナーで遊ぶのはつまらないと思う。
 - ・遊びたい時に遊びたい物を出して遊ぶ方が良いと思う。
 - ・こたつなど出て家庭的な雰囲気が良いと思う。でも、子どもが走らない為にいいという考えは保育者の都合だと思う。
 - ・部屋には広いスペースがあっていいと思う。走り回ってもいいと思う。
- ⑫食べ物の好き嫌いで嫌いな物をむりやり食べさせられるのはなぜだろう。
（教師側の理由）
 - ・幼稚園に進級した時困るから。
 - ・必要な量が定められているのだから。
 - ・こぼしたら困るので一品ずつ配り、一品食べ終わると次にお皿（食べ物）を配る。
 （学生の意見）
 - ・私は無理やり食べさせられた物は今でも嫌いです。
 - ・子どもの心を感じてないと思う。
 - ・「この子はこれが苦手だから」と言ってすぐごちそうさまをさせていたが、食べさせることも必要ではないか。

- ・「きょうは一つだけ食べればいいのよ。明日は二つだけ食べられるようにしようね」と言う。
- ・「ウルトラマンみたいに強くなれるよ」「先生は子どもの時〇〇が嫌いだったのよ」と言う。
- ・「これだけは食べようね」と言って、もし食べられたら大いに誉め自信をつけさせた方が良くと思う。
- ・無理やり食べさせるのではなく、その子どもにあった援助をすれば良いと思う。
- ・私なら、給食は全部配って好きな物から食べられるように、楽しみのもてる雰囲気づくりをしてあげたいと思う。

このようにして、①から⑯までまとめた内容を伝え各項目ごとにコメントを加えた。こうしたことを踏まえて「求められる保育者像」を考え合った後、残った疑問・質問について再度調査をした。

* 調査内容

保育実習後5回の事後指導を行いました。3回の授業をあてて皆さんの実習での思いを発表してもらったところたくさんの疑問や質問が出てきました。その中には実習日誌には書けなかった悲しい経験もありました。そしてひとりひとりの問題をみんなの問題として捉え直すなかで授業がすすんでいきました。各項目ごとにコメントを松本先生からいただき、実体験から得た経験とつきあわせていく中で、保育者像について考えてきました。質問・疑問がまだあなたの中に残っていたら教えてください。

(番号を○で囲んで下さい。)

- ① ある
- ② ない

「ある」と答えた人のみ具体的に書いて下さい。

(4回・5回目の保育実習事後指導の授業の時間)

項目ごとにまとめることにより「自分のやったことに対してみんなの意見を聞くとさまざまな問題が出たり他のやり方があることを知り勉強になった」「自分だけの考えだけでなく個性にあった対応の仕方があることに気づきそれを実践を通して学べた。」などの感想がもたれた。他の学生からの共感的な言葉やこうすればよいのではというような意見、また指導者の立場、園側の理由もはっきりわかり保育の現実が理解できたのではないかと思う。またひとつひとつの項目に対し丁寧にコメントすることによって、体験を通じて理論の再発見や再構成を各々が感じたのではないかと考えられる。

3) 「求められる保育者像」をまとめ学生に提示する。

(6回目の保育実習事後指導の授業時間)

学生各々の体験を発表し合い、考察を加え、お互いアドバイスを取り交わすことによって得られた保育者像は下記の通りである。

* 学生が抱く「求められる保育者像」

- ・子どもの心をしっかり受け入れ、子どもから発せられるシグナルをすばやくキャッチし自分を見つめ直し、自分が何を見落としていたのかを学んでいく柔軟な心と感受性をもつこと。
- ・自分の保育について研究心をもち、どんな時も学ぶ心を忘れないこと。
- ・いつも明るく笑顔で子どもと接し、子どものことを一番に考え子どもを理解していこうという姿勢をもつこと。
- ・子どもたちの周りの環境を考え、のびのびと遊ぶことのできる場をつくること。
- ・保育者にとって都合のよい不自然な行動をさせるような保育であってはならない。子どもにも無理なことを押し付けるのではなく、どうしたら子どもの成長のプラスになるかを考え、今の保育に満足するのではなく、絶えず自分に問いかけ頑張る、悩んでそれを見つけていくこと。
- ・職員同士・保護者・地域社会との間がぎくしゃ

くしては子どもにとってよくない。自分のこころを平静にして出勤すること。相手に対して細やかな気遣いができること、人の意見を受け入れることができること、協調性があること。

- ・子どもを幸せにしてあげたいという気持ちと同時に、子どもと生活して自分が幸せにされているという気持ちをもてば子どもが結果的に幸せになれると思うこと。
- ・子どもに“教える人”ではなく子どもと共に育ち、逆に子どもから“教えられる人”でありたい。また、子どもにたくさんの夢や希望を与えることができ、子どもがもっている未知なる可能性・興味を伸ばしていける人になること。
- ・子どもが成長する段階に沿ってより豊かな経験を得られるように見守っていくこと。
- ・保護者に注文をつけないこと。
- ・子どもに好かれる優しさのある人間であること。そして、子どもを心から愛せる人になること。

このように、学生が抱く保育者像には、子どもに保育者が寄り添って見守り成長を促す、という保育方法を用いている保育者をイメージしている者が多い、ということが特徴なのではないかと考えられる。

「子どもが好きだから」「女性の職場として最適であるから」等さまざまな理由を抱いて入学してきた学生たちが、大学で学んだ理論や子どもたちとのふれあいの中から、また、実習園で先生方から指導を受ける中から、あるべき保育者のイメージを把握する機会をもち、上記に示すようなかなり具体化された保育者像をつかむことができるようになってきている。

実習事後指導は、学生たちにとって自分自身を見つめ直す機会でもある。彼女たちが、今後の課題（これから卒業までに学んでいかなくてはならないこと）に向けて「求められる保育者像」に近づけるように研さんを積むであろうと確信する。学生が保育意識を常に確認しながら、個々の課題意識を高め、広めていくことは重要である⁶⁾。

4. まとめ及び課題

5回の事後指導の後、残った疑問・質問はないかと問うたところ、2名の学生を除いて「ない」と回答した。（この2名の学生の質問内容に対しては6回目の授業の時にコメントした。）保育実習を経験して自信をなくした学生に対しては再度、保育者への志向が奮起され、また保育者志向のある学生に対してはより志向を高めるきっかけになったのではないと思われる。学生自らの経験や実習園での先生方の指導・助言を各々が全員相互に伝え合うことによって、学生自身の本音や心の動きがわかり、その後実習指導を行う上での一助ともなった。なお、学生の考察においては、一年生は「目の前に起こっている行動をとりあえず押さえるような指導方法」を選ぶのに対して、二年生は「その行動をまずじっくり受け止めじっくり指導する方法」を選ぶ傾向が強い⁷⁾という研究にも一致する。また、学生ひとりひとりが自らの特性に応じた指導方法を身につけることが大切であるということも明らかにされた。

本研究の結果、学生が捉えている保育者像の一端が明らかになった。しかし、それは、個人差が大きく、学生ひとりひとりの課題を同時に現しているものと考えられる。また、記録し自己評価することで学生の課題意識を高めることができた。これは保育における指導とは何かを考えるうえで、学生の経験に基づいた具体的な課題が提供され、理解の一助となったと考えられる。

今後は、提示された「学生が抱く保育者像」と、文献や資料にある保育者像とを比較検討し、保母養成校としての実習指導の課題についてさらに追求していきたい。

《謝辞》

本研究を行うにあたり貴重なご助言・ご指導を下さいました美作女子大学短期大学部非常勤講師松本亨枝先生に感謝申し上げます。

註及び引用文献

- 1) 宮里六郎(1993) 保育者養成における実践記録の活用。日本保育学会第46回大会研究論文集, 411頁。
- 2) 戸田雅美, 伊東輝子, 細川かおり(1995)「子どもを見る目」の自覚化—保育者養成における試み(1)—。日本保育学会第48回大会研究論文集, 191頁。
- 3) 石川清明, 野本茂夫, 宮崎豊, 益田勢津子, 関岡節子, 吉田雅子, 根津明子(1994) 保育者養成における幼児理解と指導法の教授に関する実践的研究(3)日本保育学会第47回大会研究論文集, 355頁。
- 4) 前原 寛氏は「実践の照らし返し」とは, 現場の実践を取り上げて研究したことが, 今後の現場の実践のよりよい方向を示す道標となる意味であると, 指摘している。(前原 寛(1995) 保育研究における実践研究の位置づけの試み。日本保育学会第48回大会研究論文集, 272頁。)
- 5) 野田令子(1995) 施設実習のねらいと事前・事後学習(2)。日本保育学会第48回大会研究論文集, 347頁。
- 6) 石川, 野本, 宮崎, 益田, 関岡, 吉田, 根津, 前掲論文, 356頁。
- 7) 井上栄子(1994) 保育の指導方法についての研究Ⅱ—事例にみる指導方法の特徴—日本保育学会第47回大会研究論文集, 299頁。

(1995年12月1日 受理)